

## ハイデルベルク信仰問答講解説教19「頭を上げて生きる」(2012年1月8日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

【ダビデの詩、賛歌】わが主に賜った主の御言葉。「わたしの右の座に就くがよい。わたしはあなたの敵をあなたの足台としよう。」主はあなたの力ある杖をシオンから伸ばされる。敵のただ中で支配せよ。あなたの民は進んであなたを迎える／聖なる方の輝きを帯びてあなたの力が現れ／曙の胎から若さの露があなたに降るとき。主は誓い、思い返されることはない。「わたしの言葉に従って／あなたはとこしえの祭司／メルキゼデク（わたしの正しい王）。」主はあなたの右に立ち／怒りの日に諸王を撃たれる。主は諸国を裁き、頭となる者を撃ち／広大な地をしかばねで覆われる。彼はその道にあって、大河から水を飲み／頭を高く上げる。(詩編110：1-7)

被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。被造物だけでなく、「霊」の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。(ローマ8：22-25)

## 【説教】

今日は、第19主日、問50-52の部分を手がかりにして御言葉に聴いてまいります。まず少しおさらいをしたいと思います。前回の説教は、第18主日のところ、キリストの昇天を扱う問答でありました。そこでわたくしが強調したことは、「キリストは今どこにおられるのか」ということです。それが今のわたしたちの生き方に大きく関わってくるということを申しました。わたしたちはキリストに結ばれ一つだからです。今、キリストがおられるところ、わたしたちは決して無関係ではない。つながっているのです。では、どこにおられるのか。それは使徒信条に従って言えば、「天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまへり」今、キリストは天におられる、神さまの右に座しておられる。しかもキリストはただお一人でそこにおられるのではない。わたしたちを連れ立って、そこにおられるのです。だから信仰問答は言います。問49「わたしたちがその肉体を天において持っている」と。

もちろん、わたしたちはこの地上に生きております。けれども、キリストに結ばれているわたしたちは、この地上から天上へとキリストによってつなげられているのです。その体の一部は天に届いているというのです。それがキリストの昇天の恵みです。こういう表現は、ハイデルベルク信仰問答特有の表現です。でもぜひ皆さんにはこういう感覚、センスを身に着けていただきたい。そして自分がどういう存在なのか、考えてほしいのです。洗礼を受けてキリスト者になるということが、他の人とはどこが違うのか。決定的に違うところがあるのです。それは天とのつながりを持って生きていくということです。

ここで、今一度、注意しておきたいのは、「天」は、聖書では神さまの御支配のなるところを言います。「神の国」とも言いますが、それは遠い別世界の話ではない。また死んでから行くところでもない。わたしたちはもう既にその神さまの御支配にその体の一部が入っているのです。キリストが天に昇られそこにおられるからです。そして大切なことは、わたしたちはそういう天とのつながりをこの地上において映し出す存在として生きていくということです。

わたしたちは洗礼を受けて教会に連なります。教会は、聖書では「キリストの体」と言われます。そのキリストは、今、天に昇られたキリストに他なりません。神さまの御支配にあるキリストです。わたしたちはそこにつながっているのですから、わたしたちの存在を通して、神の国、神さまの御支配をこの地上に現すのであります。どんなに罪の闇が深く思っても、神さまはわたしたちに神の国を託し、わたしたちを通してその御支配を現してくださいませ。だからこそ、わたしたちはその自覚を持たなければなりません。この世に妥協して流されていいはず

がありません。どうせ罪人だからとあきらめたり、後ろ向きの考え方はいけません。前を向いて少しでも神の国に相応しく変えられていくのです。問49「地上のことではなくキリストが神の右に座しておられる天上のことを求めること」とあります。それは地上のことで完結しないということです。そこがすべてではない。わたしたちの帰るべき場所は天にあるのです。そこが最終の目標です。この世では当然不完全なことばかりでしょう。でもそこで見切りを付けないのです。まだ先があるのです。その先へとキリストはわたしたちを常に助け導かれるのです。ですからわたしたちの意識を常に天に向けていくことが大事です。

そこで今日の問答、問50、51を見てください。こどもまた今のキリストの状態を示していると理解してよいでしょう。

「神の右に座す」というのは、キリストが神さまと同じ主権を持たれているということです。あるいはその全権を委ねられたということです。万物を統治される全権です。それは神の国、神さまの御支配をこの世に行き渡らせることであります。わたしたちは「主の祈り」で「御国を来らせ給え」と祈ります。それは神さまの御支配がこの世になりますようにという祈りです。キリストは十字架と復活の御業を行い、天に昇り、神さまの右に座し、その主権をもってなおこの世に働きかけてくださるのです。わたしたちが罪に打ち勝ち、神さまと共に生きることができるよう導いてくださる。そういうキリストが「頭」としてわたしたちには共におられるのです。

そして、そのことが今のわたしたちの生き方、特に御国を現す御業に影響を与えます。もちろん、わたしたちは一人でそれができるわけではありません。キリストにつながってこそできるのです。キリストと共に、その手足となってキリストの御業に仕えるのです。「天からの賜物を注ぎ込んでくださる」とあります。これは神さまの御支配をこの地上に現すためのあらゆる業と考えてよいでしょう。あるいはキリストの体、教会を形成する賜物です。わたしたちの伝道、それに伴うあらゆる良き業のことです。それはわたしの中から出てくるのではない。頭であるキリストから注がれてくる。その源泉はキリストにこそあるのです。そこを間違えると人間は途端に傲慢になったり、あるいはその限界性の中であきらめが起ったりするのです。良い時は、自分たちのことを誇るようになる。また悪い時は、これ以上は進展しないだろうと簡単にあきらめる。

教会を人間の力で造っている、維持している人々が多いのです。でもそこには必ず限界があります。人間は有限な存在だからです。そのわたしたちが造るものには当然限界があるのです。でも頭であるキリストから絶えずその賜物を

受け続けていくなれば、そこに限界はありません。わたしたちの限界を超えて、神さまの御業がそこに行われるのです。そういう信仰をもって教会に仕える、伝道することが必要ではないでしょうか。自分は今、神さまの御業に仕えているのだという自覚です。その時に、わたしたちの業は必ず守られるでしょう。どんな小さな業をも用いられるのです。もちろん自分の思い通りにすることがイコール神さまの御業なのではありません。御心に従ってなされることが用いられるでしょう。

以前、キリストの三職についての問答を読みました。問3 1-3 2ですが、預言者、祭司、王という三つの務めのことです。キリストは御自身が神さまの言葉として、その神さまの御意志を地上に現してくださった預言者であり、また大祭司として神さまの御前にわたしたちを贖い、執り成してくださり、また王としてその御支配のもとにわたしたちを治め、守り導いてくださるといことです。でもそれは単にキリストに限られた務めではない。キリストに結ばれてその命に与っているわたしたちもまたこの同じ務めに生きることができると信仰問答は言います。「わたしは信仰によってキリストの一部となり、その油注ぎに与っている」頭であるキリストのもとに、わたしたちはその手足となって同じ御業に生きているのです。その業は必ず守られ支えられるのです。

さて、最後に問5 2に注目しましょう。ここはキリストの再臨について扱っています。これまでわたしたちは、今、キリストがどこにおられるのか。キリストの現在の状態を考えてきました。それがわたしたちの生き方とつながっているということ。更にここで信仰問答はキリストの再臨について扱いますが、これは現在のことではなく、むしろ将来のことに関係しています。これもわたしたちの生き方に大きな影響を与えるものです。わたしたちがどこを見ているか。それがわたしたちの生きる姿勢をつくるのです。どういう姿勢で生きているか。

将来のこととして、聖書が示しているのは、終末、世の終わりがあるということです。でもそれは単に世界の終わり、滅亡ではなく、聖書はその時にキリストが再び来られるということ、そのキリストがすべてを裁く最後の審判があると示します。それを教会は大切な信仰として受け継いできました。

しかし、これには常に大きな危険、誤解が伴いました。つまり終末は恐ろしい裁きであり、わたしたちはその行いによっては裁かれるかもしれない。そういう不安が支配します。そのような中で、しばしばそのような終末の恐怖心をあおって、信仰を迫るということも起こってくるのです。しかしそのような恐怖心は本来、キリスト教の信仰とは異質のものであります。初代教会の時代もそのような誤解があり教会が混乱しました。パウロはそのような終末についての混乱を憂慮して、再三、手紙の中で冷静に行動することを勧めています。「神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです」(1テサロニケ5：9)ここに終末に対する基本的な姿勢があります。

それ故に、問5 2は「キリストの再臨はあなたをどのように慰めるのですか」と問います。キリストに結ばれた者にとって、それは慰めでしかないというのです。なぜなら、その再臨されるキリストは、恐ろしい審判者ではない。その方はわたしたちのために何をなさったか。「かつてわたしのために神の裁きに自らを差し出し、すべての呪いをわたしから取り去ってください」これは十字架のあがないの御業を指しています。裁き主であるお方は、同時にわたしたちの救い主であるということです。かつてわたしたちのために救いを行ってくださったお方が、その時にもう一度来てくださる。しかもわたしたちはそのお方と無関係ではない。そのお方に結ばれているのです。

ここが重要なことですが、終末をキリストと切り離されたところで考えるのではなく、キリストの中で捉えることです。「イエス・キリストは昨日も今日も、また永遠に変わることはない方です」(ヘブライ13：8)そのキリストがわたしたちの過去も現在も将来のことにも責任を負ってください。すべてをあが

なわれている。キリストと結ばれたならば、わたしたちの将来も既に約束されているのです。どうなるかわからないのではない。その将来も含めてわたしたちの存在はキリストにおいて守られているのであります。それがわたしたちの希望なのです。

人間の存在は、この地上の命で完結していません。この世だけよければそれでいいのではない。その先の命、将来を考えて今をどう生きるかが重要なのです。そこを見ているか見ていないかで大きく違ってくる。昨日、偶然テレビで現任金城学院院長の柏木哲夫先生が出ていましたので見ていました。日本のホスピスの草分け的な存在ですが、もちろんキリスト者であります。一昨年でしたか熊本でも講演会がありわたくしも話を聞きました。テレビでは先生の洗礼のことなど、かなり信仰のことにも踏み込んだ内容でした。ホスピスの働きをする中で多くの方々を看取ってきた。人間は死を間近にすると、魂がむき出しになる。それまではいろいろなもので魂を覆っていた。社会的な立場、プライド。けれども入院してすべてが取り去られ、魂がむき出しになる。そこでその人が何によって生きているのかが分かる。どこを見て生きているか。信仰をもって、将来を望み見て召される、そこには希望のある看取りがある。キリストに結ばれたわたしたちもそのように希望をもって地上の命を終えることができるのです。希望をもって死ぬ。これはおかしな表現でしょうか。でもそれが言えるのです。信仰がそれを可能にする。そこにわたしたちの慰めがあるのです。

もしこの世で完結していたなら、それこそそうつむいて生きていかなければならないでしょう。人生は悲しみの連続です。辛いことがあります。そして最後には死があります。そこで人生を閉じる。そこにどんな希望があるでしょう。でもわたしたちにはその先がある。しかも神さまはわたしたちを赦し御自身の御国に迎え入れてくださる。キリストがそのことを保証してくださるのです。今日からまた頭を上げて生きていきましょう。お祈りをいたします。